

## ①哲学対話「バランス」(前半より)

A: 私が思ったバランスっていうのは自転車なんですよ。自転車って右左のバランスを、自分たちが無意識にとって前に進むものじゃないですか。二輪車のものって、ふつうそのまま止まってるわけじゃないので絶対どっちかに、コケますよね。それを、自転車に乗るっていう行為は、こう、自分自身が、もう、体に身についた無意識のバランスで、右左をうまく、右にこう足をこいであるときは左に重心をかけるっていう、無意識な行動で、あの、自転車っていうのは走ってるので、だから同じで、Bさんと一っしょで、あの、私にとってバランスがとれてるっていうのは、要するに風のない湖面のようにまっすぐな、あの、なにも波打っていない状態が、バランスがとれてるっていうものなのかなと思ったんですよ。だから、同じで、あの、石ころが一つあれば、ちょっとバランスを崩して、ちょっと自転車がこけそうになったりとか、それが見えていたら、こう自分はそれをうまくこう避けて、あの、自転車を走らせるのと同じだし、で、湖面に何かポンて一つ投げられると、波紋が広がるのと同じで、それは一種のバランスがとれてないみたいな、あの、目に見えるものなのかなっていう、私も同じイメージをもったんです。

青木: うん、だから…

B: なんか、なんか、その、まあ、ま中心が安定してたら、その揺れもなんかこう、うまいことね、なかなかこう揺れるけどこう、あの、まあなんとか、保っていけるんやけど。やっぱりこうね、あの…なんか、なんか、崩れてる、くず…崩れるじゃないけど、なんかもっともって負荷がかかってたら、そこが修正しきれないで、あああってなっちゃう、ような感じですよ。なんか、イメージですけど。

青木: となると、まあ、そう…あ、いやまあ、いろんな言葉があれ、つねに裏返しはあるんだと思うんですけど、バランスがとれてるっていうのが、やっぱりとれてない状態前提なところがあるから、で、しかも今の、その、綱渡りとか自転車のたとえだと…バランスをとろうとしてないと崩れるっていう感じですよ。だから、ほっといたらあん…ほっといても安定してたまに崩れるっていうよりは、基本崩れてるもので、それを、バランス、をちゃんと保とうとするからバランス保たれてる状態になるっていう。まあだから自転車すごいわかりやすかったですけど。止まったらパタンといくわけですよ。でも、とろうとして動かすと真っ直ぐになるっていう。崩れてるほうが先にあって、なんとか安定してるっていうようなイメージですね、こういまのバランスと。じゃあ、がっちり安定してて崩れるっていうよりは…先もう崩れてて。その始まり方もなんか面白いんですけど、どう、どう始まったんだそれって感じがしますが、崩れるところから始まるって。で、それがまあ安定しているという状態にもってかれると…うん。

A: もう一つね、さっき青木さんがはじめにおっしゃったお洋服の問題、おっしゃったじゃないですか。こう、バランスがとれてるかって気になるっていうの。あの、お洋服のことでいうと、そういうファッション的なものでいうと、あの、すごくその、バランスを考えるとめっちゃくちゃ無難なコーディネートになってしまう可能性が、あるじゃないですか。でも、そこを一つ外すことで、あの…なんだろう、光る感じになっちゃうっていうのがあると思うんですよ。だから、いまさっきの自転車みたいな、あの、バランスがとれないものを無意識にとろうとしてるんじゃないかって、わざとバランスがとれてるものを外すっていうのが、ファッション的なバランス、なんじゃないかなって思うんですよ。

青木: なるほど。

C: 同じ、私も、考えなんですけど。その崩す崩し方を、どう崩すかが個性かなと思うんです。だから、その、まったく逆のものをもってくるのか、それとも同じものをもってきて目立たさすのか、で、あの、ファッションもそうですけど、あの、性格っていうのもそうじゃないかなと、人間の性格みたいなもの。あの、すごいバランスのとれたね、人っていうのは、良い子すぎたり、もう、落ち着いてはるから、面白みがないっていうのかな。でも、なんか、ち…あの、バランス的に、こう、どっか、こう飛び出てるはるところがあったり、どっか凹んでるところがあったりすると、それがすごい気になるけど、でもそれがその人の個性であって、あの、外から見たら、あの、なんかあの人あれ、すごい良いよねっていうね、感じの個性で輝いてはるところもあるんじゃないかなって思うので。私は、バランスっていうものは、均等にとれてていいものと、崩れてもいいものがあるような気がして。崩れてるから目立って輝くやん、っていうね。なんか、そういうなんもあるのかなって。だから、あの、息子を見たときに、すごいバランスが悪くって、あの、思ってるんだけど。バランスが悪いと思ってる、ある日突然なんか思ってたことをしたときに、えっ、できるやん、すごい！とかね、思えるっていうのはやっぱり、その日ごろこの子はバランス崩れてるやん、と思いついてるから、あの、そのできた部分がすごい輝いてくるっていうか。だから、バランスっていうのは、私は、あの、きちっととれてるだけがいいものではないような気がして。崩れてるほうがかえって、際立つところあるやんと私は思う性格なんですけど。だから、その人その人によってそのバランスっていうのも違ってくるかな、と思ったりする。

青木: うーん、なるほど。だから、人によって考え方が違うとか、人によって、こう、好みが違うとかっていうの、一コの説明として、なんかおっけい人間にとってのバランスみたいなものがあるんだけど、その崩れ方が、こう、人によって、どのタイミングでどう崩れるかどうか、違ってると考えたら、完全にバランスが保たれてる人って全然個性がない人かもしれない。こういうタイミングでこういう崩れ方をするんだっていうのが…ある種その人

らしきみたいなのを、こう、醸し出してくるっていう…うん。ま、最初からバランスが崩れてるっていうのは、ま、確かにしんどいっていう面も、ある、ものなんですけれども。まあそのしんどいって、だから、どっからがしんどいかですよ。どういう崩れ方するとしんどいか。どういう崩れ方すると…まあ、ある種こう…良い意味で個性になったりとか、するのかっていう。で、あとまあやっぱり気にな…一方で、こう、バランスが保たれてる状態っていうのも、しんどい状態、バランスが崩れてしんどい状態からするとバランスが保たれてるほうが楽、に見えるんだけど。でも、かなりストレスレの状況でバランスを保ってるのだとしたら、バランスを保つっていうのは、かなり、こう、力を入れなきゃできないことかもしれない。あるいは、緊張感を伴うから、そんなにリラックスはしてないかもしれない。

C: なんか、最初はやっぱりバランスを保ちたいっていう気持ちがあるんだけど、そのバランスが、あの、ちょっと頑張ったらバランスがとれるんだったら、頑張れると思うんだけど。もう、全然なんぼ頑張ってもバランスとれないやと思って、変な居直り方をすると、いやと思ったらなんか、それがすごい、あの、見方を変えるっていうんですかね。そしたら、うん、これがこの子の個性やんって思うと、なんかすごい、楽になる部分があるっていう。だから、バランスをとろうとするとすごい、その、傾いたほうを上げなきゃならないから、大変になるけど、もう崩れっぱなし、シーソーみたいに、誰も乗らなかつたらパタンと傾いてうへ上がってる状態で置いといても、あれはシーソーやんって、みんなが思ってくれる。

青木: なるほどなるほど。

C: でも、人が乗ったときにちょうどバランスで、こう、なるけど。もうそこまでシーソーいうものはパタンと傾いて置いたるもんやと思ってしまうと、あとは楽かなと思う部分もあるんですよ。

青木: なるほど。だから、しんどくなるのはバランスを保たなきゃいけないと思わせる何かがあったり、あるいは、その持ち上げのみに凄まじいエネルギーがかかるんだけど、あるいは、その、もう、たぶん無理なんだけど、どうやっても釣り合わないような崩れ方をしてるんだけど、それがまだ見えないときとか、どうしても、こうこだわりたいときは、すごい負荷がその人にかかるし、力を使わなきゃいけないからしんどくなる。ま、それはたしかに、一つのわかりやすい感じの説明ですよ。

D: 障害児をもつてるとね、やっぱりその、親というのは、その、社会との、そのバランスをうまくとれるようにつねにやっぱり考えてると思うんですね。で、それは社会の中で生きているわけで、私たちだけで生きてるわけじゃないのでね。だから、そういう意味で、や、あの、その社…バランスを保とう、ある程度のバランスをとろうと思うんだけど、やっ

ぱりとれないときってありますよね、いろんな場面で。で、そういうときに、やっぱり必ずしもその自分が思ってるバランスが本当に正しいのかなとか、あの、ある程度とつとかないとね、その社会的にうまくいかないから、それはとつとかなないとけないんだけど、これで、ほんまにオッケーなんかになって。そういうときはけっこうありますよね、なんか。それは、あの、すごく思うことがありますね。この、こういうとり方で自分の子供をたとえば、もうぐっと押さえといて、それでなおかつ、その、あの、社会のなかでうまくやっっていけるようなかたちをとるっていうのは、はたしてこれ正しいことじゃないんじゃないかなって思う部分もあります。でも、ある程度のやっぱり社会性をもたさないと、社会のなかでは生きていけない。だから、そこを、まあそれがバランスみたいなもの。ちょっと違うバランスかもしれないけれども。そういうことをやっぱり、あの、障害児をもっている親御さんっていうのはみんな、それ考えてらっしゃるんじゃないかなと思います。

青木：うーん、難しいとこですね…。

D：また、あの、服装のバランスとは違うかもしれないんですけど（笑）。それだったら、ここだったらまあね、個性があるからこれでいいわっていうふうに、それで、ね、もう、あの、できるけれども。これ、子供と社会の関わりやと、これでいいっていう場合が必ずしもオッケーじゃないじゃないですか。だから、そこんこはやっぱり親の難しさっていうか、そこをうまくバランスとるように、これみんなそれぞれ工夫してるんじゃないでしょうか。

青木：そうですね。道路の真ん中歩いて、これは個性だとかつっても、ちょっとねっていう。ちゃんと歩道あるこうかっていうことを考えると。そういう意味で言うと、まあ、さっきの個性っていう意味でのバランスのなかでは、みんなに合わせてる状態がバランスがとれてる状態だっていうのが、だと思っんで。で、個性が出てるのが、見ようによってはバランス、そこの外し方があると、いうことなんですけど。でも、ほかのいろんな人と一緒に生きてこうと思ったら、ほかの人と、まああるいはほかの人にも合わせてもらわないといけないのかもしれないけど、お互いに、こう、合わせるってなると、だいたいここだよっていう。で、まあそれがたぶんいまの言い方だと、バランスがとれてるっていう状態だと思っんですけど。とらなきゃいけないときってあるわけですよね。自分の、こ…この崩れ方は個性じゃなくって。それをちゃんと、こう、釣り合わせて。ほかの人の個性とかと釣り合わせて、みんながこう、同じことができるように、とかっていう…うん。

A：いまね、おっしゃったそのバランス、世間とのバランスっていうのは、先ほどの自転車と同じで、親は、もう無意識のうちにそのバランスをとってる、って思っんですけどね。それをバランスをとってるとかって考えてるんじゃなくって、もう、それが生活のようになって、その、どうやって折り合っていくかっていうバランスを、つねにこう、無意識にとって

る、っていうふうに、なんかすごく感じたんですよね。